



# 高齢者の暮らしを考える

超高齢社会を迎えた日本。医療や介護ニーズの増加と現状についてお伝えしていますが、今後は、在宅での最期を希望する方が増えていくと考えられることから「看取りについて」考えます。住み慣れた地域や自宅で最期を過ごすためには、ご本人と家族、サポートしていただく専門職の方々の連携が重要です。

今回で8回目となる「多職種勉強会」で、在宅での看取りについてご講演をいただいた、専門職の皆さんにお話を伺ってきました。

## インタビュー

「やっぱり家が一番！」

〜とまどき入院、ほぼ在宅〜



看取りのケアに関わる際に  
大事にしていることを  
教えてください。

### ■ 医師 野田先生

本人、そして家族がどんな最期を迎えたいのかを一番に考えています。松阪に開院してから約2年間さまざまな看取りに関わらせてもらいました。

その中で看取りとは100人いたら100通りの方法があるということを感じました。こうあらねばならないというものはなく、ご本人が

どうやって過ごしたいかを大切に、またそれができるだけ実現させるためにサポートしていきたいと思えます。

### ■ 訪問看護師 市川さん

入院中から在宅へ戻るとき、医療的な処置や対応に不安を持っている方がほとんどです。また、感じている不安が何なのか具体的には言えない方もたくさんみえます。私は訪問看護師として、まずその不安は何なのか、解決するためにはどんなサービスがいいのか一緒に悩み、考えることを大事にしています。答えは一つではないですし、気持ちも変わっていくこともあります。その都度その都度、同じ目線になって悩みながら方法を考えていきたいです。

### ■ 訪問介護員（ホームヘルパー） 迫間さん

入院を選択する理由として、在宅での介護力が不足していることがとても多いです。自宅での最期を希望する方が利用者さんの中でも一番多いのでその気持ちに寄り添い叶えるためにも、訪問介護員としてさらなる充実したサービスを提供できるように、他職種と連携しながら考えていきたいと思えます。

### ■ 介護支援専門員 高山さん

まずは本人、家族の気持ちを十分に聞くことを心がけています。その上で、必要に応じた関係機関へできるだけ早くつなげていくことが大切です。また医師や看護師、介護士など多職種の方が関わってもらうことで支援の幅も広がり、希望する最期が叶えられる可能性も高くなると思います。多職種の方と顔の見える関係性を築き、よりよい連携が実現できるようにしていきたいです。



(左から)  
松阪市協松阪支所 訪問介護事業所  
訪問介護員 迫間 栄子さん

松阪市民病院 訪問看護ステーション  
看護師長 市川 千恵子さん

おひさま在宅クリニック  
院長 野田 知宏先生

松阪地区医師会 居宅介護支援事業所  
介護支援専門員 高山 なおみさん